

岡山大学大学院社会文化科学研究科『文化共生学研究』第14号(2015. 3)

特集 東アジアのなかの日本学

序

土屋 洋*

本特集は、2014年2月27日に開催された岡山大学大学院社会文化科学研究科（以下、本研究科）附設東アジア国際協力・教育研究センター主催によるシンポジウム「東アジアのなかの日本学」（以下、本シンポジウム）の報告論文3篇を掲載するものである。

本シンポジウムは、「日本学」という領域を積極的に東アジアに開いていくことを企図し、東アジア各地の声に耳を傾け、各地の視点を取り入れながら、「日本」像をあらためてとらえなおしたい、という企図のもとに開催したものである。当日は、その期待が裏切られることなく、歴史認識問題や領土問題といった敏感な問題に対しても活発な意見が飛び交い、会は盛況を呈した。

以下、6名の報告者と報告内容について、簡単な紹介を行いたい（報告順）。

楊円氏は中国・東北師範大学の外国語学院日本語言語文学研究科博士課程に在籍し、続く報告者・徐氷教授の指導学生である。本シンポジウムでの報告「満州国首都「新京」の日本人社会の形成とその特徴に関する考察」は、詳しくはこの報告論文を改編した本特集掲載論文をご覧いただきたいが、旧新京（長春）における日本人社会の形成過程を明らかにしようとするもので、該地の日本人数や居住地区を丹念に調べた労作である。

続く徐氷教授は、同じく東北師範大学外国語学院の日本語学部長で、近年は『20世紀三四十年代中国文化的日本認識』、『中国近代教科書中の日本和日本人形象』といった近代中国の対日認識に関する一連の著書を上梓されている。本シンポジウムでの報告「中日近代教科書衝突のパターン化研究」は、こうした近年の研究成果の一端を披露されたもので、これも詳細は本特集掲載論文をご覧いただきたいが、戦前日中間にすでに存在した4度の教科書問題の概略を示し、総括を行うものである。これまでほとんど知られていなかった戦前の日中教科書問題を明るみに出したというだけでなく、近年の教科書問題をより長い視点から考えるための視座が提供されたという点で、大いに意義のあるものであろう。

レ・ティ・トゥ・ハー講師は、ベトナム・フエ大学附属外国語大学日本語文化学科の所属である。専門は日本語学とのことだが、本シンポジウムでは「ベトナムから見た日本」というテーマでご報告くださった。詳細は本特集掲載論文をご覧いただきたいが、同報告は学校教科書の記述やインターネット上の情報等を素材に、ベトナムの日本観を紹介するもので、ベトナム人の、特に若い

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授、東アジア国際協力・教育研究センター専任教員

世代の「日本」イメージがどのようなものであるのかを理解する上で、参考となろう。

崔喜植助教授は、韓国・国民大学校社会科学大学国際学部にも所属し、近年は日本でも「韓日会談における独島領有権問題—韓国と日本外交文書に対する実証的分析—」（李鍾元等編著『歴史としての日韓国交正常化』）といった研究を発表されている。本シンポジウムでの報告「東アジアでの海洋領土紛争—独島と尖閣諸島—」は、こうした成果の一部であり、2010年までに日中韓の間で、見えづらいながらも、領土紛争を平和的に管理しようとするOcean Regimeというべき枠組みが構築されており、それを活用すべきことを訴えるものである。「二国間関係の多国主義化」「管理された摩擦」「不安定な平和」といったキーワードで表現される現状への認識は、領土問題という敏感な問題に落ち着いて向き合うための有効な視座を提供してくれるもので、日本の聴衆にも大いに訴えるところがあったらう。

頼振南教授は、台湾・輔仁大学外国語学院の院長で、日本語文学科の教授である。「『竹取物語』と『宇津保物語』におけるアジア叙述」という本シンポジウムでの報告は、古代日本に伝来した外来文化が中国文化を中心としながらも、インドをはじめとするアジア文化の痕跡をも見ることができるとし、それを『竹取物語』と『宇津保物語』のなかに探ろうとする。「中国」と「台湾」との間で揺れているかに見える台湾では、近年目立たないながらも「アジア」アイデンティティが頭を擡げてきているように見えるが、頼教授の報告もあるいはそうした問題意識に裏打ちされたものであったらうか。

最後に、主催側である本研究科より、辻星児教授にご報告いただいた。「朝鮮王朝時代における日本語の研究と教育」と題された報告は、14世紀以来の朝鮮王朝時代に行われた日本語の研究と教育について、当時の教科書等に基づきながら、具体的に紹介するものである。「体系的な日本語教育が国家によって480年間継続したことは世界でも類がない」と述べられる通り、朝鮮で古くから日本語教科書が編纂されてきたことに驚かされるとともに、伝統的な東アジアにおける国際関係が必ずしも中国とその周辺諸国との関係に収斂するわけではないことをあらためて認識できた。

以上、さまざまな時代、地域、分野に分かれた報告は、安易な総括を許さないが、東アジア各地の研究者が一堂に会し、それぞれの視点から「日本」について語っていただいたことは、我われの自己認識を新たなものとし、日本とアジアの未来を考えるためのよい機会になったであろう。

なお今回のシンポジウムは、日頃から留学プログラム等で関係の深い協定校からの協力を得て行われたもので、協定校間の教員交流・学生交流を進めるために開催したのもでもある。当日は、留学プログラムの共同指導教員同士が顔を合わせたり、指導学生同士が議論の場を共有するなど、この点でも大いに意義があったといえよう。

最後に、今回のシンポジウムにご協力くださったすべての方々に感謝の意を表して、本特集の序に代えさせていただきます。